

生き地獄の思い出

滋賀県 竹山 梯三

私は大正十二年一月二十六日、農家の三男坊として生まれた。上の兄二人が陸海軍に入隊し田畑を耕作する人手がなかったため、尋常高等小学校を卒業後青年学校に通いながら、病弱な父母を助けて姉二人と食料の増産に努めたが、「ほしがりません勝つまでは」という厳しい食料の供出に苦しんだものだった。

昭和十七、八年ともなれば、支那事変はおろか、米英に対し大東亜戦争の幕が切って落とされた。一億国民火の玉となって、内地外地を問わず食べる物も不足がちの中、もくもくと働いたものである。

昭和十八年四月、本土空襲を実感。翌昭和十九年四月一日、兄弟三人そろってお国のためにと皆様に見送られ中部第三六部隊敦賀に入隊、桜の花は今を見ごろと満開であったが、営内の規律は徹底したものでっ

た。ラッパで起き、ラッパで寝る。初年兵教育も今の世代には及びもつかない非人道的なものだった。しかし、この軍隊生活が人間最大の心身修行の場として憧れと誇りを持ったものである。

軍国主義一色に塗りつくされ、陸海双方が手柄の奪い合いに発展、本格的な侵略戦争。内閣総理大臣まで軍人がつかさどり、物資のない小さな島国、米英の資源をあてにお先真っ暗なことは十分首脳部でわかっていながら大ぼらを吹き、大風呂敷を広げ、「これが正義の戦争」と国民を駆り立てた。

敗戦は時間の問題、可哀相に一般国民そうとも知らず、本土決戦に備えて女子供にまで竹槍の指導等をした。本土より先に犠牲になった沖縄は血の海、続いて広島、長崎の原爆投下。ここにもこの世の地獄あり、ついに無条件降伏、戦争終結、軍国主義の砦は解かれた。全日本国民がほっと一息、本当に心から胸をなでおろしたことだろう。

しかし、ここから私の冥土に近い生き地獄への出発が始まった。「千島列島は日本の領土だから必ず内地

から迎えに来る、それまで兵器を磨き、小銃その他の手入れ、訓練に励め」との中隊長命令であった。日本は負けたのになぜこんなことをせねばならんのかな——兵隊たちは小声でつぶやいた。上官の命令に反することはできない。朝の点呼、五カ条朗読。軍隊、まして千島色丹守備隊、孤島である。世間の情報がわかるはずがなかった。

ある捕鯨会社社長が、ラジオのニュースを耳にして、「漁船が今出ることとはできない。千島はどうなるかわからん状態や。今なら船が皆休んでいる、貸してあげるからせめて根室まで引き揚げなさい。北海道まで行けばまず大丈夫と思う」と、親切に連絡してきてくださった。しかし、中隊長の「勝手な行動は駄目だ、軍の命令を待つ」、この言葉が運命の分かれ道となった。

三日後の朝、沖合に山ほどもある大船が停泊。慌ただしく命令が出たとの連絡、内地からの命令でなくソ連軍からのものだった。皆が一瞬耳を澄ませた。兵器弾薬等、使用可能な機材一式を港の船着桟橋付近に今

すぐ集積すること、隠したら銃殺だという。小隊長が「小銃に印ある菊の紋をやすりで消し取れ、ソ連軍に渡るのだから」。これを聞いた中隊長、声を震わせ「銃に傷をつけたら駄目だ」と、脅えていた姿が目に映る。もう出し終わったかと再度連絡、確認をした後、はしけでソ連兵がわからない言葉で自動小銃を手携えて上陸してきた。

後でわかったことだが、樺太で戦争をしてきた兵隊だったのが気も心も荒々しく、動作そのものが何をやるにも最低のことばかり、日本人から取り上げた羅針盤（ジシャク）を時計と思い込み、腕に幾つもつけ喜んでいた。また別の兵隊のダイナマイトをむしゃむしゃ口にする姿も珍しかった。

いよいよ怒涛の始まり、「ヤポンスキーソルダート、ウィストラ」、この言葉が抑留生活丸三年の間一日として耳に飛び込まぬ日はなかった。「ヤポンスキー東京ダモイ」にだまされて輸送船の船床に積み込まれ、風の吹くままあてなき旅、羅針盤は真北を指した。船の進む方向とピタリに大泊で停泊、何かと思えば重油

の補給。時既に九月も中旬、朝晩は早くも夏服姿の我々には寒けを覚えた。船の航路は来る日も来る日も真北に進む。「ダモイ東京」は夢のまた夢、お互いの心中は言わず語らず真っ暗やみ、待ち伏せるは想像もつかぬ異国の大地。間宮海峡も目の届くほど狭くなり、大船はもう浅くて行き止まり、船は大きく旋回、海かと思えるほどの河口を上り始め一昼夜余り、ついに機械の音が止まり海中に錨の沈む音が聞こえた。

うっすらあたりが白み始め、夜が明けたらもう高い落葉松には真っ白に霜の花が咲いていた。どえらいところに連れて来られた。顔は蒼白「もうこりゃあかんでー」、見知らぬ異国の地で朽ち果てるのか、生きた心地はさらさらなかった。この思いが五十年を過ぎ去った今も脳裏に焼きついている。

これからが本当の修羅場行き、筆や口で表すことのできぬ三途の川の渡り始め。

「ヤボンスキーヴィストラ」、天窓一つの家畜車に詰め込まれ、動物と同じく鍵の掛かった扉の中で「味噌も糞も一緒」のような状態。ロシアの黒パンの味付

けは塩と酢、見たこともない外側黒焼きのもので、食べられるかなーと思うほど。空腹にはかえられぬ、食べよう、手でひきちぎり分かち合った。小便は下に流れ落ちるが、大便だけは捨てなければならず、チリ紙などがなくなれば使っているふんどしを破り、くるんで何とか小窓から投げ出した。

喉が渇く、少量の水を大切に飲み、励まし合い、歯ぎしりを噛んで耐えた。貨物列車も時には半日余り止まっていることもあったが、二十六日間、何ぼ遅いとはいえ一カ月近くも鉄道の上を走ればかなり北極圏に近いところまで連れてこられたに違いない。おろされたところは沿海州サラワッカーだった。仮設の半分天幕建ての収容所で、この地から初めて見た北極星はひととき大きく頭の真上にあった。もう少し北へ行けば紛れもなく北極であろう。

この日から、共產主義独特の過酷なノルマ制度に鞭でぶたれ、番兵の銃口からいつ火をはくかもしれないぬ捕われの身として、氷点下四十度、五十度の厳寒の中、苦しみの明け暮れが続く囚人生活の第一歩が始まっ

た。朝、鐘の合図で起き、少ないながらも朝食、身支度、用足し、全員が整列、点呼。ラーゲル（収容所）の門を出るまで一時間はかかった。作業現場までの往復時間二時間、作業八時間、収容所に帰ってから濡れた物を乾かす、ほころびを縫う、炊事の薪取り、自分たちの薪取り、働く時間を通算すれば十四時間余り。これに対し一日分のカロリー量は、朝、黒パン三百五十グラムとニシンの塩スープ、昼、顔の映る雑穀がゆ、夜、黒パン四百グラム、粟スープ、こんな食事では人間が立っているのも精いっぱいである。土工作业八時間分のカロリーの六五パーセント余り、零下四十、五十度という酷寒、耐え切れないのも当然。衰弱、栄養失調、骸骨に皮をかぶせた人間ロボットのそのものであった。手足に生えている毛も伸びず毛穴に縮んでしまえば脂肪分が無くなり、ペキペキと折れた。また、体に縦に筋が入ったりもした。寒さで皮膚が凍傷、真っ黒になり我が身と思えないほど。これでもロシア人は重労働の手を緩めることはなかった。むごいという一言に尽きる。

真夜中の夜間作業、砂バラスの荷おろし、吐く息が凍り、古布で顔を包んでいたが、あごから一尺以上もある太いつらが下がった。まつ毛に吐く息が凍りつき、目の前が見えなくなるのもしばしば。捕われの身、犬畜生にも劣る。哀しい、悔しい、情けない、みじめさ、出る涙も枯れ果て、まさに生き地獄、まさに凍りつくシベリア大陸、この地こそが捕虜扱いにされた我々にとって最悪の地獄であった。

生きていくから苦しまねばならんだ、死んだら楽になる。「もし帰るようなことがあれば供えてくれ」、自ら伐採する木の倒れゆく下になり、尊い命を落としたり人もある。戦争の傷跡がいかに悲惨な悲劇を残したか、必ず後世に語り継ぎたい。

日本人捕虜に回される食料はごく少量、空腹を満たすにはほど遠いものだった。後で聞いた話「昭和二十年、ソ連はどさくさに無計画で一度に日本人を何十万人もシベリアに送り込んだため、ロシア自体の糧秣が不足したから捕虜に食わす食料がないのは当然」。食こそ人間なれど餓鬼同様食べることだけしかない。食

べられるかと思えばすぐ口にほうり込み、噛んでみては吐き出す。酷寒のシベリアで都合よく食べられる物があるはずもなかった。

時たま糧秣倉庫の入夫に出た。貨車からの荷おろし、穀類、旧満州領から輸送してきた物資だろう、ポロポロと生の大豆が落ちている。この生の大豆、本来ならば口の中に入れてだけで吐き出すものを、宝物を拾ったかのように「ああ、うまい」と食べた。他の穀類、粟、キビ、トウモロコシ等は皆食べられたが、粳、エンバクなどは、どれほど腹がすいていても喉には通らず、噛んで甘味だけ吸った。それも多くは噛めない。口の中、舌が切れ血が出るので、一息ついてまた噛んだ。

拾い集めた穀類をほろ布に包み番兵に見つからぬよう持ち帰り、入夫に出てこなかった同胞に少量ながら分けてやり、一時の空腹をいやしたものである。また、粳、エンバクを空き缶に入れ、薪で焼き粉にしスープにして飲む、生きるための知恵であった。酷寒の地では野菜と思われる青物類は一切なく、顔の映るよ

うな穀類がゆの中に三日に一度ぐらい馬鈴薯が細切れで入れられた。これでは体に大切なビタミンCはないと言った方が早い。皮膚に斑点ができ広がる、皮の表が硬くなる、毛穴が埋まる、体内の水分(汗)は出ない、これが原因で死んでいかれた人もいた。捕われた身の悲しさ、何とか祖国の地を踏むまでは耐え抜こう。

これも生きるための知恵。誰言うとなしに、松葉を煮出しこの汁を飲めばビタミンCが取れる。氷雪を溶かし湯を沸かし、松のヤニで嫌な物だが、これが薬だ、ビタミン剤や、皆で飲もう、鼻をつまんで飲む人も何人かいた。

参考までに寒さの話をする。SL蒸気機関車、今は電車になったが、古い機関車が遊園地などに遊び材料に置かれている。現在二、三機は昔ながらに動くものもあり、鉄道記念日には小さい子供さんや家族連れのお相手をして楽しませてくれるところもある。ご承知のとおり、機関車は火を燃やす釜に車輪がついているだけ、中のお湯がたぎり蒸気になる。やけ

た釜、触ればもちろん火傷をするはずだ。その鉄の釜も、零下四十、五十度ともなると外部から冷え込むのが早く、手の平で触っても暖かいと感じるくらいであった。いま一つ。酷寒では乾いた木が一番強いと言われる。鉄は寒さに弱く、凍る。土工作業で使う十字鍬、人間の肩くらいの高さから振り落とせば、十丁が皆とは言わないが、二、三丁、地に落ちた角度により柄の差し込まれた部分が二つに割れ、鍬は九十度以上曲げれば折れてしまう。

作業内容であるが、土工の穴掘り作業、一メートル×二メートル角、これが一日に割り当てられたノルマである。普通の生活をしている者ならたやすい量です。ところが条件が異なる。空腹、氷点下四十度以上。穴を掘るのに十字鍬と石ノミ、岩盤や石は割れ目があるからノミをうまく使えば割れるが、粘質土で凍った土ともなれば、鍬でもノミでも打ち込めば食い込むが、打ち込んだ個所のみ粉になるだけ。作業ノルマの二分の一も掘れず、共産主義ロシアの「働かざる者食うべからず」、この掟が少ない食事を最低に落とす。

雑穀がゆの大豆粒数が一番少ない時には、一食分六十粒しかなかった。

塩水の中で半煮えの豆が空き缶を食器にした缶の底で一つ並びに集まって会議をしているようなもの。五穀の中で一番小粒は粟である。火力の乏しい釜で一度に多く煮るので鬼皮が割れて、ある粒はごくわずか、口の中で何ほ嚙んでも同じこと。汚い話だが、食べる前の物と口から胃腸を通り肛門から便となって出てきたものと変わらない。小さな粒が消化するはずもないが、胃の中にある間は空腹が和らぐ。これでは骸骨になるのも無理はない。

私は、土工作業の中でも建設の方には少し予備知識があったので、火力発電所基礎工事班技能士として回された。型枠組みが終わり、続いてセメントの流し込み、現場の都合で酷寒の最中でもやらされた。ドラム缶に氷雪を放り込み薪でたく。お湯を沸かし、この湯で練らないと凍りつき使い物にならない。見る見る間に冷え込み、凍ってくる。この作業ほど命の切り売りはない。人間を死に追いやる寸前で、よくも体が耐え

られた。地上工事は、五、六月のシベリアの夏季、短い夏の間には組み、流し込み、上塗り、はつり、煉瓦積み。日本の兵隊が捕虜として、シベリア全土ですべての作業に奴隷として働かされていたに違いない。

煉瓦が運び込まれた。金輪の一輪車で現場に移しかえていた。ふと一枚の煉瓦に目があった。竹べらで「カエリタイ」と書き込まれていた。ああ、この煉瓦を焼いている場所でも日本人が捕虜となって血涙を流し、ただもくもくと飢えと酷寒に苦しみながら、いつ祖国の土が踏めるともわからない幻のかすかな希望を抱き働いている。「死んではならぬ、命の続く限り耐えてくれ、生きながらえてくれ」、我が身も苦しさに変わりないけれど、心から戦友の無事を祈った。

前項に述べたとおり、血のにじむ過酷な重労働も、昭和二十年、当初の冬が一番最悪の条件だった。寝たままの姿で死んでいった戦友。また、朝七時作業出発、冬のシベリアはまだ真っ暗、明かりは往復の番兵が針金の先にぼろ布を巻きつけ油をつけ燃やしているだけ。薄明かりで透かして見れば、地面にうずくまっ

たままで凍死、命を落とした戦友も眼のあたりにしてきた。自分もいつこのような姿で死ぬ運命にあるかわからない悲惨な思いで、「南無阿弥陀仏」と手を合わせたものである。

水の時期も辛うじて耐え抜き、待ちこがれた夏の訪れ。四、五月、朝はまだ霜の花は真っ白だったが、草木の芽が鬼皮を割る大陸。ましてシベリア、四季でなく二季、冬から夏、夏から冬で夏季が短く、日本の五、六月の気温が最高。木の芽立ち芯の伸び、成長が非常に早い。霜もなくなった七、八月、木の先はぐんぐん伸びているのに下葉は早くも紅葉をしてくる。八月下旬から九月、霜が降り始める。この半年間だけが生きている心地がした。日が長い太陽の光は、栄養をコントロールし体の調子を整えてくれた。作業はやりやすく、ノルマがこなせる。割り当て分ができると「ハラシヨラポータ」でパンの量がふえる。満腹とはいかぬが体も活気づく。明日はノルマが少し高い。日本人の長所で短所であったが、時間まで無理をする。パンが倍ほどになり、腹も膨れるが、翌日になっ

たらノルマのパーセントが倍ほどになっている。残業をしないとできなくなった。また無理をする。ところが体も限界、頑張って無理をしたため、作業のノルマパーセントが驚くほど上げられた。「後の祭り」、腹の膨れたのもつかの間、寒さが待ってくれない。地面の表は凍り始める。日も短くなる。十一月ともなればはや零下十度を割る。ノルマ量は落ちる、パンは日に見えて小さくなる、腹はすぐ等々、元の木阿弥。自分で自分を苦しめ、また次の年もこの繰り返しで三年が経過した。

いつかは帰れるだろう祖国日本、夢うつつにも帰りたいの一心が、丸三年間のシベリア生活に終止符を打たせてくれた。「ダモイ東京」とナホトカ港に集結、嘘で過ごした抑留期間、日本から日の丸を立てて迎えて来てくれた大拓丸に乗り込んでも、舞鶴港に入港上陸するまで疑心暗鬼。これで本当に帰ってきたのだ、懐かしの祖国日本へ。皆で抱き合い、復員の喜びをかみしめた。この喜びを味わうことのできなかつた数多くの戦友たち。氷のシベリアで犬死に、無言の復員、

いまだに雪と吹雪の下で眠っている友を偲ぶ時、帰ってきた喜び以上のせつなさが胸を痛める。

夢にまで見た故郷、懐かしい祖国、皆様との出会い、「復員おめでとう、よく耐えて帰ってきてくれました」、苦勞を偲んでの出迎えであった。

生き永らえることができた、自由の身になれた、見るものすべてが感無量の一言であった。身体検査、体は何とか異常なし。「皆さん、シベリアの垢を落とししてください」、三年ぶりで入ったお風呂、天と地の違い、この世の極楽ここにあり、嬉し涙が流れた。食事、碗に盛られた真っ白な銀飯、これも三年ぶり、箸で口に運んだ。何とその瞬間、砂糖をなめたほど甘く感じた。そして、この味が五十余年過ぎた今も思い出され、現在何不自由のない生活に心から感謝をしている。

私は初年兵で、終戦時の階級は終戦上等兵。「報酬をお渡しします」、内訳書を見ると、兵隊当時は一月九円五十銭、一年百十四円、三年間分三百四十二円いただいた。これだけもらえば家に帰り職を探すまで

何とかなるだろう、ありがたい。受け取った後「皆さん、売店に美味しい饅頭があります。食べ過ぎないように食べてきてください」。喜んで皆と一走り売店に行き、久方振りで「饅頭十個ください」「はい、どうぞ」、手際よく紙袋に入れてくれた。「お代は」と尋ねると「一つ十円だから百円いただきます」、びっくり仰天、三百円もあれば半年ぐらい生活ができると思込んでいたのに三分の一払った。貨幣価値の変わっているのにまた仰天。舞鶴に三、四日いたら持ち金はスッカラカン。

家に帰る汽車賃がなくなってしまった。早急に送ってもらわないと帰れないと相談すれば、係員いわく「復員されてきた皆さんほとんど一文なしです、心配しなさんな、復員された人に限っては終着駅払いとなっておりしますので、身内の方にそこまで来て払ってもらってください」とのことだった。汽車賃、電車賃後払いで乗せて頂いたのはこれが最初で最後である。お笑い草のひとつまであった。

五十年が過ぎ去った現在も冬季になると両足の指先

が痛む。零下五十度というシベリアで凍傷にやられ、特に両方の親指は肉を切り取らないと元まで腐ると言われ、一関節、骨だけにした。五日間作業の休みをもらい、ドクターのペーチカで温め何とか外傷でくい止めることができた。草木が芽を吹く頃になって、肉が十分でないが盛り上がってきた。回復はしたけれど指の皮肉ともにぶよぶよ、これが元通りかたくなるまで大変だった。しかも凍傷にやられた指は寒さに弱く、十一月の声を聞くと霜焼けの心配。靴下は厚物を二足履き、大事に注意をしているが、冬季二、三回はやられる。普通の霜焼けなら針で血を抜けば治るが、私は水疱になり、腐るように穴があき、肉が盛り上がるまで半月余りかかる。寒い毎日が続けば時には一カ月も治らない(霜焼け、雪焼けになったその指だけで他に広がることはない)。これもシベリアの後遺症だとあきらめ、手当ては十分にやっている。

復員。舞鶴から京都、東海道線上りで近江八幡下車、次の連絡は省営バス、土道を砂ぼこりを立てて走る。夢にまで見た故郷苗村山之上、懐かしの我が家。

出迎えてくれた親兄弟（父母の額に深いしわ）、「ああ、老け込まれたなー」、安否を心配してしてくれたのであろう。ただ一言も出ず、嬉し涙の対面であった。

御先祖様に無事復員の報告（合掌）。社寺、自治会、地域の皆様、親類、お隣、留守中家族がお世話になりありがとうございますと礼を述べた。皆、あまり変わった様子はなかったが、子供たちの成長には驚いた。

さあ明日から社会人、まず先に何をすべきか。健康は宝、体力作り、元の丈夫で元気な体に戻るよう食生活に気を付け体調に注意し、これとあわせて職を決めなければならぬ。

復員当時は世間の目も厳しく、共産思想が「赤だ」と嫌がられていた。駐在所の巡査がしばしば立ち寄り、抑留期間中の話を聞きに来る。ソ連で教えられたことを日本に帰り続けてやるのかと尋ねる。これを見て世間一般の人々は「あれ共産党、赤らしいなー」と噂した。

親しく話をすることも拒まれた。転々と職探し、就

職はスムーズにはいかなかったけれど、戦後日本の復興が功を奏し、建設、建築と人手が必要となり就職難は解消。移り変わる社会情勢の中で心身ともに充実、自営業であったが、今は第一線を退き、耐え忍んだ貴重な体験を通し地域社会のため役立ちたいと心掛けてきた。高齢になったが、日夜神仏の加護に感謝をしつつ、健康に留意し、及ばずながら公職を預かる一社会人として明るい選挙の推進、二十一世紀に向け大きく羽ばたく青少年の育成に老骨に鞭を打ち頑張っている。

【執筆者の紹介】

昭和十三年 村立苗村尋常高等小学校卒業

同村四年制青年学校卒業

昭和十八年 徴兵検査合格

昭和十九年四月一日 中部三六部隊入隊

八月 千島列島色丹島守備

昭和二十年八月 終戦と同時にシベリア沿海州サラワ

ツカー收容所抑留

昭和二十三年十月二十日 ナホトカゝ舞鶴港 大拓丸

復員

職歴 建設建築業兼農業

昭和五十四年 建設業施工管理技士取得

選挙管理委員会委員長など公職を歴任

平成六年 自治大臣感謝状受賞

地域社会のため貢献された功績大であります。

(滋賀県 堀井 源一郎)

少年志願兵のシベリア体験

京都府 今井 敬一

はじめに

昭和十八年十二月二十八日、満州第一六六二部隊士官室にて転属の申告をしている一人の少年志願兵があった。この少年志願兵は、京都市出身で旧制中学半ばにて陸軍少年飛行兵を志願し、滋賀県中部九八部隊より十一人の戦友とともに同部隊に転属した十七歳の

少年志願兵、私こと今井敬一であった。

私は南方戦線に転属になる予定で三重県明野陸軍航空隊で教育を受け、転属部隊である滋賀県九八部隊で待機中であつたが、昭和十八年末、急遽満州に転属命令を受け、他の十一人とともに満州一六六二部隊に転属して来たのである。急に満州に転属になった理由は、部隊から引率に來た愛知県名古屋市の加藤曹長に聞いたところによると、盲腸患者が出たために軍隊で言う員数合わせで決まったとのことであつたが、結果的にその時にシベリア抑留が運命づけられたと言つても過言ではない。しかし南方戦線に転属していたら、結果論であるが、今日この年まで生きていたか否かは不明である。人の運命はだれにもわからない、人間の命と同じで自分でも知る由もない。

満州一六六二部隊は、本隊は新京緑園にあり、関東軍(第二航空軍八〇〇部隊直轄)の対空無線隊にて、部隊の任務は、満州主要地域にある基地飛行場に派遣分隊(通信所)を展開させ、航空情報の受信伝達、飛行機との対空通信、基地飛行場司令部との情報